

富ふ嶽がく

乃の木ぎ希まれ典すけ

峻りゅう増そう富ふ嶽がく千せん秋しゅう聳そび

赫かく灼しやく朝ちゆう暉き八はつ洲しゅう照て

説と休や区く風物ふうぶつの美び

地ち霊れい人じん傑けつ是こ神しん州しゅう

【作者】 乃木希典（二八四九〜一九二二年）明治時代の陸軍軍人。長州藩（山口県）江戸屋敷に生まれる。文を吉田松陰の叔父玉木文之進、剣を栗栖（くりす）又助に学び、また詩歌にも優れ石林子（せきりんし）、石樵（せきしよう）と号した。歩兵大十四連隊長心得として西南戦争に出征し、連隊旗を西郷軍に奪われる屈辱を嘗（な）め、日清戦争では第一旅団長となった。日露戦争では、第三軍司令官に任命された。明治三十七七年大将。明治天皇の大葬当日静子夫人と共に殉死した。年六十四才。

【語釈】 *富 嶽：富士山のこと。 *峻：山の高く重なるさま。 *嶺の高くそびえる形容。 *赫 灼：あかあかと光りかがやくさま。 *朝 暉：朝日のひかり。 *八 洲：大八洲（おおやしま）。 *日本をいう。 *神 州：神の国の意で日本の美称。

【通釈】 富士山は高く美しく千年もかわらぬ姿で聳え、光り輝やく朝日はこの峰より昇り、隈（くま）なく大八洲の国を照らすのである。あれこれ風景の美しいことばかりをいうのはやめよう、土地がらも、人物もすぐれているのが日本の神州たる所以（ゆえん）である。